

本当に「知りたい」と思うことが、研究になる

西南学院大学人間科学部 准教授

安藤花恵 (あんどう はなえ)



Profile — 安藤花恵

2006年、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士（教育学）。日本学術振興会特別研究員PD、九州国際大学法学部准教授などを経て、2014年より現職。専門は認知心理学。著書は『芸術心理学の新しいかたち』（分担執筆、誠信書房）、『知覚と感性』（分担執筆、北大路書房）など。

私が心理学を志した頃をふり返ってみると、お世辞にも「よい学生」「真面目な学生」だったとは言えず、なんとも恥ずかしいような気持ちになります。ですが、心理学を志したきっかけをお話するためには、そこを避けては通れませんので、今日は恥を忍んで、若い頃の不真面目な日々から話を始めていきたいと思います。

演劇をするために大学へ！

正直に告白しますと、そもそも私は、「心理学を勉強するために」ではなく、「演劇をするために」大学に進学しました。中学・高校と演劇部に入っていた私は、そんなことは恥ずかしくて誰にも言えませんでした（そして、今までほとんど人に話したこともなかったのですが）、内心「女優になりたい」と思っていました。でも、小さな中学・高校の演劇部での経験しかなく、自分に演劇の才能があるのかなのか自分でもよくわかりません。大学に入ったら、もっと広い世界で思い切り演劇をやって、自分の力を試すんだ、そう思っていました。

だから、どんな大学のどんな学部に入るのかと選ぶ際も、一番の条件は「思う存分演劇ができること」。動物が好きな私は獣医になりたいという気持ちも少しあったのですが、理系学部は実験が多く、課題やレポートなども大量で拘束

時間が長い、と聞いて、早々に進路を文系に絞りました。その中で、心理学なら文系だから、拘束時間も短いだろうし（実際は、そうでもないと思いますが……）、人の心理を知っておくことは演劇をやる上でも役に立ちそうだ、という演劇メインの理由で、大学では心理学を専攻することに決めたわけです。

そんな私ですから、もちろん学部4年間は、勉学より演劇優先の日々です。卒業論文に取りかかる時期になってさえ、卒論の指導教官をお引き受けくださった、恩師である京都大学大学院教育学研究科教授・子安増生先生に、安藤さんはまだ気持ちが研究に向いていないようですね、と言われる始末。今ふり返ると、よくこんな学生をお引き受けくださったものと、申し訳ないやらありがたいやら……といった感じです。

心理学研究の美しさ

勉学より演劇優先で打ち込んだ学部生時代でしたが、それだけ打ち込んだからこそ、女優への道は早くにきっぱりと諦めがつかました。やればやるほど、舞台上で演じることの難しさや大変さがよくわかるし、そうすると、演技の上手な俳優というものがいかにすごい人なのか身に沁みてわかります。私は到底、その境地に立つことはできないと思いました。

また、徐々に心理学、特に、認知心理学におもしろさを感じるようになってきました。心理学を勉強しようとする多くの高校生がそうであるように、私も大学に入るまでは、数多くある心理学の分野の中でも臨床心理学しか知らず、「心理学＝カウンセリング」だと思っていました。しかし、私が入学した京都大学教育学部には、「臨床系」の他に、「実験系」と呼ばれる、認知系心理学の講座（教育認知心理学講座という名前前で、当時、認知心理学、教育心理学、発達心理学といった分野を専門にする先生方や大学院生がいました）がありました。授業を受けらるうちに、入学時には知りもしなかった「実験系」のほうが、どんどんおもしろく感じられてきたのです。

仮説という形で、調べたいことが明確にあって、それを明らかにできるような実験を工夫し、データを取り、仮説が支持されるかどうか、統計的にはっきり結果が出るという、この明快さ。よい研究は、明らかにしたいことを調べるための実験デザインがすばらしく、その論の筋道は非常に論理的かつ明快で、美しくさえあります。

そんな心理学研究の美しさに魅力を感じた私は、大学院に進学することに決めました。ですがこの時はまだ、「研究は研究、私生活

は私生活」と、研究を自分自身の生活とは切り離れたものと考えていました。研究とは頭脳を駆使して行う高尚なものだと捉えていて、不真面目な私の私生活なんかと関わるようなものではないと考えていたのかもしれませんが。

演劇と心理学が重なったとき

研究生生活のはじめの一步は、学部の卒業論文です。当初私は、ユーモアの伝達を研究テーマにしようと考えていました。「おもしろい話を、おもしろく人に伝えるにはどのように話せばいいのか?」ということテーマに据えて、コメディの脚本を演技の上手な人と下手な人に演じてもらい、その演技を比較するという実験計画を立てたのです。その計画を発表したときに、指導教官であった子安先生がおっしゃった一言が、私の研究人生を変えました。

「それは、ユーモア伝達の研究ではなくて、演技の上手い人は下手な人とどう違うのか、という研究ではないですか?」

そして、さらに、研究をその方向へ変えるよう後押ししてくださいました。「演劇をずっとやってきたということは、安藤さんの強みです。これは、安藤さんにしかできない研究です」と。

そんなことが研究になるんだ! それを研究テーマにしてもいいんだ! まさに目から鱗でした。私がこれまでやってきた「演劇」と、これからやっていこうとしていた「心理学」が重なった瞬間でした。また、4年間演劇に打ち込み、演技の上手な俳優というのはとてもすごい人だ、ということ肌で実感している私です。あの人たちが何を知っているのか、どんな力を身につけているのか、その秘密を明らかにしたい!と強く思いました。研究者として明らかにしたい

という以前に、「私が、個人として知りたい!」と強く思ったのです。

結局それからずっと、演劇俳優の熟達化をテーマに、初心者俳優と経験の長い俳優では何が違うのかということの研究し続けています。研究を続けていると、辛い苦しいこともあります。調べたいことを明らかにするのにびったりな実験計画が思い浮かばない、実験参加者を多数集めなければいけない、そこまでやって結果が出なかったら……というプレッシャー、実際に思うような結果が出なかったときのショック、なんとかでき上がった研究を発表した時に、それが受け入れられなかったときの挫折感……。もうやめてしまいたいと思うこともあります。それでもやめずに続けてこられたのは、私が、心理学者としてではなく個人として、本当に知りたいことを研究テーマにしているからだと思えます。だって、知りたいんですもん。

心理学研究のすばらしさは、そこにあると思えます。おそらく、人間に関するありとあらゆる疑問が、すべてそのまま研究テーマになり得ます。本当に「知りたい」ということをそのまま研究テーマにして、調べて明らかにすることができる、こんなにおもしろいことはないと思いませんか? これから心理学の研究者を志す方には、ぜひ自分が本当に興味を持って心から「知りたい」と思えることを、テーマに選んでいただきたいなと思えます。

データで示すから、共有できる

心理学研究のもう一つの魅力は、結果をデータで明瞭に示すことができる点だと思います。たとえばみなさんは、演技の上手い俳優は、演技中何をしていると思いますか? 多くの方は、「役になりきっている」と考えるようです。

ですが、実際はそうではありません。自分の演じる役の立場で、役と同じ感情を感じるという「役の視点」に立つだけでなく、観客から自分がどのように見えているかを常にモニターする「観客の視点」にも同時に立っています。また、演出家から指示されたことを覚えておいて、その通りに実行するためには、その俳優本人の「俳優の視点」も失ってははいけません。そのことを示したのが図です。これは私の研究結果ですが、初心者は三つの視点のどれにも立てていないのに対し、経験の長い俳優は、すべての視点に同時に立ちながら演技していることがわかります。

演劇をしていない人に「演技の上手な俳優って、ただなりきっているだけじゃないんだよ」と言葉で説明しても、実感がわかないかもしれません。でも、こうやってデータで目に見えて示すことができれば、「本当にそうなんだ」ということがわかってもらえます。このように、データという共通言語を介して、研究結果を多くの人に伝えることができることも、私の感じる心理学の魅力です。私は今後も、演技の上手な俳優の、その「すごさ」の秘密を知りたいし、そしてその「すごさ」をデータで示すことで、広く世間の人に「ね、すごいでしょ!？」と伝えることができれば、と思っています。

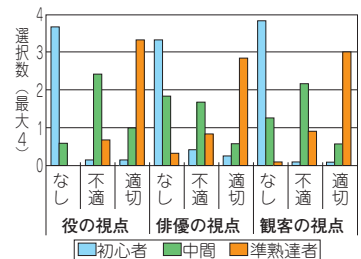


図 各群 4 名の俳優について、演技中に三つの視点にどのように立っているかを 12 名の準熟達者が選択した人数 (『芸術心理学の新しいかたち』誠信書房より)